

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する 考察：『新編水滸画伝』の使用語彙を例に

孫，琳淨

九州大学人文科学研究院：プロジェクト教員（講師）

<https://doi.org/10.15017/7183052>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.125-140, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

——『新編水滸画伝』の使用語彙を例に——

孫 琳 淨

はじめに

日本近世文学を代表する小説ジャンル・読本と中国白話小説との関わりに関する研究は、近年、めざましい発展を見た。読本という呼称は絵本に対して読むべき本の意で使われ、特徴として、

①日本在来の題材を主体に中国小説を趣向とすること。

②勸善懲惡思想を理念とすること。

③因果応報観で統括すること。

④雅俗折衷の和漢混淆文で綴ること。

の四点が挙げられる。^①筆者もこれまでに、『水滸伝』の影響下に成立した近世読本の最高峰『南総里見八犬伝』（曲亭馬琴著、文化十一年〔一八一四〕～天保十三年〔一八四二〕を対象に、『八犬伝』全体における『水滸伝』のストーリー面での受容の仕方、及び馬琴の創作意図（特徴①②③にあたる）を考察してきたが、現在ではさらに、④読本の文章作法に注目している。

和漢混淆文はすなわち、雅言、俚言に漢語、特に白話語彙を交えた七五調を基調とする文体のことを指す。しかし、そもそも「白話」とは何か、また何を以て「白話語彙」と判定すべきなのか（特に日本近世文学において）については、依然として曖昧なところが多い。

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

白話とは中国の口頭語彙を使用する書記言語のことである。一九一七年、胡適が雑誌『新青年』（「文学改良芻義」）で白話を用いて今日の文学を作るべきという主張を提唱して以来、白話を研究対象とした体系的な研究は日中両国間で絶え間なく続いてきた。その甲斐もあって、近年、中国文学における白話語彙の識別基準はほぼ確定しつつあると言える。

一、中国文学における白話語彙の識別基準

言うまでもなく、白話語彙には二通りの定義がある。一つは白話文で用いる語彙のこと。この場合は文言と共通する多くの語彙が含まれる。もう一つは白話文特有の語彙のこと。つまり、白話文では用いられるが、文言文では原則として（口頭発話を写す必要がある場合を除く）用いられない語彙。基本後者をもって考えればよいのだが、裏を返せば、白話語彙を判断するには、まず何が文言であるかを明確にする必要があるということになる。この問題については、小松謙氏の著書『現実』の浮上——「せりふ」と「描写」の中国文学史²⁾に詳しいので、これを参照して整理したい。

中国の書記言語の基本形は「漢文・唐詩・宋詞・元曲」という言葉で示されているように、漢代の『漢書』により一応完成をみた。それ以前に、口頭言語の記録という性格を持つ『尚書』『左伝』『詩経』『楚辞』などの文献もあるが、書記言語の体制が整っていなかった上に、各国がそれぞれ種類を異にする書記言語を使用していた（現在我々が目にするテキストは無論書記言語の一本化を経過したあとのもので、どこまで原型を伝えているのかは疑問である）ため、白話語彙研究の対象にはならないとされる。つまり、白話語彙を検討するには、『漢書』以後、すなわち書記言語の基本形が完成した以後のものに焦点を合わせなければならないのである。

また、六朝時代になると、文体は用途ごとに使い分けられ、歴史書及びそれに準ずるものには史書的文体、書簡及びそれに準ずる儀礼的な文には四六駢儷体が用いられる。そのような状況下で現れた漢訳仏典や志人小説、樂府詩などの文献には、例外的に口頭語彙、すなわち白話語彙が用いられているという（『搜神記』など志怪小説の会

話部分にも多少口頭語的な表現が散見するが、文体は基本的に歴史書そのものである。

要するに、白話文学は一般的には、敦煌変文などの未成熟な状態を経て、宋代の講談テキスト、金代の語りもの、元代の曲と、漸次その成熟度を増しつつ、明代の白話小説に至って完成の域に達したと認識されているが、口頭言語は中国最古の文献とされる『尚書』から既に確認できる。しかし、この段階ではまだ書記言語の体制が整っていなかった上に、文字の統一も行われていない。そのために白話語彙研究の対象にはならない。白話語彙を研究するには、基本的に唐以降の文献を対象とするが、唐以前六朝期の漢訳仏典、小説類（志人小説）、樂府詩も視野に入れる必要があることが察せられる。

それでは、この識別基準は日本近世文学においても通用するのだろうか。次に先学の問題点を確認した上で、『水滸伝』の翻訳物『新編水滸画伝』（詳細は後述）の使用語彙を考察することによって、日本近世文学における白話語彙の識別基準を新たに提示したい。

二、日本近世文学における白話語彙研究の問題点

近世の文献を対象とした膨大な白話語彙研究の中では、「白話」という呼称以外に、「漢語」「俗語」「口語」「唐話」などの呼び方もしばしば使われる。「白話」は前述したように、中国の口頭語語彙並びに文法を使用して書かれた書記言語のことであり、当然ながら単なる話し言葉でもなく、話し言葉をそのまま記したものでもない。ところが、「漢語」は言うまでもなく、本来漢字で書かれた言葉のことで、無論、文言も含まれる。「俗語」を平たく言うとは、俗な言葉、すなわち口語、話し言葉のこと。「唐話」は江戸時代に中国の話し言葉を指していた語である（諸呼称間の概念の違いについては後述の張海燕氏論考にも言及がある）。いずれもびったり当てはまらないので、文献の中での書記言語化された口頭語語彙を検討する際に、「白話」と称する方が妥当であろうと思われ、以下もこれに従う。

では、先行研究では対象語彙（呼称には多少の差異があるものの、いずれもここで言う白話語彙のこと）の選択

基準についてどのように言及されているのか、確認しておこう。

藁科勝之氏の『仏蘭西法律書 刑法』における唐話語彙³⁾では、「宋代以後のいわゆる俗語で、江戸時代に唐話学の成立・発展にともなう日本人に受容された語」を対象とし、木村秀次氏の『西国立志編 白話語彙考⁴⁾』では、「中国『漢語大詞典』を中心に、『大漢和辞典』『中日大辞典』『中国語大辞典』に記されている用例の出典名が、中国明代以降の文献である語……上記の諸辞書に、具体的な出典名が記されていない語でも、明代以降の語である可能性が強いと判断される」語を採取すると述べられている。また、張海燕氏が『古今奇談英草紙』と白話語彙⁵⁾において、中国文学研究史における白話の概念、及び日本における白話研究の問題点（白話と唐話、口語の概念の違い、白話という呼称を使用する意識が薄いことなど）を詳細に論じつつも、『詩経』などの歌謡や『論語』などの語録体文献」を白話語彙研究の対象とし、『英草紙』の白話語彙を

語の出自が南北朝以前である（つまり「現存する最も古い文字文献が発生してから南北朝、隋代以前まで」）

語の出自が唐・宋・元である

語の出自が明・清である

の三類に分類して、考察が行われている。

それ以外の殆どの先行研究は採録された白話語彙の識別基準について触れられていない。ただ、参照書として白話小説『水滸伝』と唐話辞書（『唐話纂要』『忠義水滸伝抄訳』『忠義水滸伝抄訳』などの）の頻用が目立つ。「忠義水滸伝解」「忠義水滸伝抄訳」は書名が表す通り、収録されている語彙は『水滸伝』から抄記したものであり、そして「唐話纂要」「唐話使用」「唐訳便覧」など一連の岡島冠山（延宝二年〔一六七四〕〜享保十三年〔一七二八〕）編纂の唐話辞書は、周知の如く、文言と白話とが混在している。また、「唐話纂要」の語彙の出拠は白話小説のほかに、「書物に拠らず、編者の唐話の能力や知識に基づいた語彙、つまり岡島冠山が長崎での唐通事時代に身につけた語彙」も認められると、奥村佳代子氏は指摘する。

白話小説や唐話辞書を語彙選出の基準として提示するのは差し支えないが、これだけでは不十分であり、かつ、利用するにあたって、文言、方言（岡島冠山の専門は「南京口」であるという）などの要素を取り除く必要がある

と推測される。

それはさておき、石崎又造氏は日本における漢文（文言文と白話文の両方を指す）の受容を、遣隋唐使時代、五山の禅僧の入宋元明時代、そして長崎の貿易港を通じて交通した鎖国時代三百年間、の三期に分ける。その上で、「俗語」、つまり白話について、

支那の俗語は初めて平安末から足利時代に亘って輸入せられ、殊に五山の禅僧によって紹介せられ、次第に漢文や日常の文書にも間々使用せられるに至ったが、未だ彼の土の白話小説を読むにはほど遠きものがあつた。

と述べている。唐代かそれ以前を出典とする白話語彙は早い時期に既に渡来し、漢語として定着しており、馬琴など江戸の人に白話語彙として認識されていない可能性があることは想像に難くない。そこで、『新編水滸画伝』に使用されている語彙を例に、具体的に考察してみる。

三、『新編水滸画伝』の使用語彙から見た白話語彙の識別基準

ここではまず『新編水滸画伝』について簡単に説明しておく。『新編水滸画伝』は『水滸伝』の翻訳に、挿絵を加えて長編読本化したものである。全九編九十一冊あるが、馬琴が関わったのは初編十卷十一冊（文化二年（一八〇五）〜同四年、盛文堂・衆星閣合刻）のみで、二編以下は高井蘭山訳。馬琴は執筆を断念した理由を書肆とのトラブルに帰したが^⑩、それに対して疑いを抱く人も少なくない。ともあれ、『画伝』の名声を後世まで響かせた原因は、葛飾北斎による挿絵のほかに、馬琴の翻訳の功績にもあると言わざるを得ない（高井蘭山の訳は先行する『水滸伝』翻訳物・通俗本『通俗忠義水滸伝』とほぼ同じと言われる^⑪）。よって、ここでは初編のみを対象とし、『画伝』と略称する。

引用に際し、『水滸伝』の本文は、昭和女子大学図書館桜山文庫蔵馬琴旧蔵和刻本『忠義水滸伝』、『画伝』は国文学研究資料館蔵本（国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/20001541/>）に依拠する。『今昔物語集』『保元物語』などの用例は、特に出典を示さない限り、『日本古典文学全集』を使用する（傍訓は適宜省略した）。

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

『画伝』には六朝期の文献（楽府詩）に初出すると思われる語彙一例と、唐代文献に初出すると推測される語彙二百五十一例が認められる。まずは六朝期の一例「爺娘」である。

(1) 爺娘（『画伝』巻之八）

楽府詩「木蘭詩」の「旦辞爺娘去、暮宿黄河边。不闻爺娘唤女声、但闻黄河流水鸣（朝に父母に別れを告げて去り、暮れには黄河の辺に野宿する。父母が娘を呼ぶ声は聞こえず、ただ黄河の流水が鳴るのだけが聞こえる）」が古典であろう当該語彙は、表記こそ異なる（「耶」と「娘」はいずれも「爺」の異体字）が、江戸以前の文献『性靈集』『三国伝記』などに散見する。

天子剃頭献仏駄。耶嬢割愛奉能仁。

（平安時代初期空海の漢詩文集『性靈集』巻一）

村南を訪へば兒は卿嬢を失ひて悲しむ。

（室町中期の説話集『三国伝記』）

次に、唐詩、伝奇小説『遊仙窟』に初出すると推測される二百三十二語から、それぞれ二例ずつ列挙して考察を試みる。

(2) 尋常（『画伝』巻之一）

劉禹錫のあの人口に膾炙する名詩「烏衣巷」「旧時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家（昔王氏、謝氏の屋敷の堂前に巢をかけていた燕は、今は普通の庶民の家に飛び込んでいる）」を典故とし、『画伝』では「よのつね」と読まれている。平安末期の古辞書『色葉字類抄』に「尋常ヨノツネシムシヤウ」とあり、同じ読みが伊京本、明応本、天正本、鰻頭屋本、黒文本、易林本『節用集』にも見られる。用例として、次の『今昔物語集』や『保元物語』、『徒然草』など江戸以前の文学作品が挙げられる。

南 東ヨリ、此ノ五節所ノ方ニ押凝テ来タルヲ見レバ、一人トシテ尋常ナル者ノ無シ。

（平安後期の説話集『今昔物語集』巻第二十八）

上道には供奉の人々処々に従ひ、王子王子の馴子舞、尋常ならぬ旅の粧をつかさどり。

（鎌倉時代初期の軍記物語『保元物語』上）

おのれづなほならねど、人の賢を見てうらやむは尋常なり。

（鎌倉時代後期の随筆『徒然草』第八十五段）

(3) 筆架 (ひかけ) 【画伝】 卷之二

出典は杜甫の「題柏大兄弟山居屋壁二首」詩「筆架霑牕雨、書籤映隙曠（筆掛けが窓から入ってきた雨に濡れられ、栞には隙間から差し込む夕日の余光を映す）」であろう。江戸以前の文学作品にこそ用例が見当たらないが、文明本、伊京本、明応本、天正本、饅頭屋本、黒本本、易林本『節用集』では確認できる。ただし、いずれも「ひつか」と音読みされ、『日葡辞書』⁽¹⁶⁾にも「Fica.Fudeuo moiasundôgu（ひつか、筆を持たする道具）」とある。「筆架」は本来筆掛けの意だが、馬琴は「ふでたて」と読む。『節用集』に収録されている語彙であるため、馬琴がその意味を知らないとは考え難く、「ふでたて」の意味を広くとったか、或いは単なる書き間違いである可能性も想定される。後の『和英語林集成』初版、再版、三版にも、それぞれ

Fude-nose. フデノセ 筆架 (hikka.) n. A pen-rack (初版)

Fude-kake. フデカケ 筆架 n. A pen-rest / Fude-nose. フデノセ 筆架 (hikka.) n. A pen-rack (再版)

Fude-kake. フデカケ 筆架 n. A pen-rest / Fude-nose. フデノセ 筆架 (hikka.) n. A pen-rack (三版)

(4) 対面 (たいめん) と記す。

【画伝】（卷之一）張天師は今いづくに在す、はやく対面いたすべしといへば…

【水滸】（第一回）太尉使問、天師今在何處。

太尉は早速尋ねます、「天師様は今どこにおられる。」⁽¹⁷⁾

「対面」には、「①面對面、②会面、③対過、迎面」などの意味があるが、『画伝』の文脈を鑑みるに、ここでは明らかに②「会面（顔を合わせる、面会する）」の義で使われている。同じ意味での用例は、『遊仙窟』の「向見称揚、謂言虚假。誰知対面、恰是神仙（さきほど散々褒めちぎるのを聞かされて、嘘だと思っておりましたが、図らずもお目にかかったところ、まるで仙人です）」が挙げられる。天正本、易林本、饅頭屋本『節用集』には「対面」とあるのみだが、『日葡辞書』では「Taimen.Vomotení muco（たいめん、面に向かふ）互いに面会すること、または、わざわざ人と会ったり、出会ったりすること。例、Fioni taimen suru（人に対面する）」と説明する。『宇治拾遺物語』

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

や『十訓抄』などに多くの用例が見られる。

いづくへおはするぞ。みづから対面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へりといふ。

かの所へおはして、この僧に対面して、物語し給ひけるが：（鎌倉前期成立と推定される説話物語集『宇治拾遺物語』巻第十五）

(5) 元来／元来

【画伝】（巻之二）よりて御身を小蘇學士といふ人の許へ。たのみ遣すべく思ふなりこの人は元来手びろく。權門の緇紳へ出入し給ふゆゑに。よく心を小てその家に奉公せば。遠らず出身の便もあらん。權門

【水滸】（第二回）我轉薦足下與小蘇學士處。久後也得箇出身。

あなたを小蘇學士さまの處に推薦すれば、いずれは出世する機会を得られるかと思う。

「元来」という語彙は、『画伝』全体において少なくとも十三回も出現している。右に引用した巻之二の用例から巻之七までの九回には「ぐわんらい」との訓が施され、巻之八以降の四回は全て「もとより」と読まれている。この傍訓の変化については次節にて述べることにするが、十三例は全て同じ「当初、本来」の義で使われている。早い例は『遊仙窟』の「元来不見、他自尋常。無故相逢、却交煩惱（元々お会いしなければ、何事もなかった。はからずめめぐり逢ったので、却って煩惱が起りました）」に見える。文明本、饅頭屋本、易林本『節用集』でも「もとより」と傍訓し、用例として『曾我物語』『太平記』などが枚挙できる。

虎と申す遊君は、母は、元来、平塚の宿の者なり。

楠は元来策を帷帳の中に運らして、勝つ事を千里の外に決せんといふ。（鎌倉末期から南北朝時代に成立とされる軍記物語『曾我物語』巻第五）

以上の考察から、六朝文献、唐詩、伝奇小説『遊仙窟』を典故とする語彙は、確かに江戸以前の文献に既にその姿が見えることが明らかになり、従って、馬琴が白話語彙だと認識していない可能性は十分考えられよう。しかしながら、次のような例外もあることは無視できない。

(6) 工夫ひま

【画伝】（巻之十） 李小二又いふやう。恩人只うたが疑うたがひを休やめて起おもき給へ、今よりわが家遠く離はなれて。毎日に見えがたきを憂うれふのみ。されどいく程もなく工夫を得えば。ゆきて訪とひまゐらすべしといひつゝ。

【水滸】（第十回） 李小二道、恩人休要疑心、只要没事便好了。只是小人家離得遠了、過幾時、那工夫來望恩人。李小二が答えます。「恩人様がお疑いになることはありませんよ、何事もなければそれでいいじゃありませんか。ただわたくしの家が遠くなつてしまします、そのうち暇を見つけて恩人様を伺いにまいりますよ。」

「工夫」は現代日本語でもよく「良い方法を見出そうとして色々考えをめぐらすこと。また、その方法、手段」という意味で用いられているが、元稹「琵琶」詩「使君自恨常多事、不得工夫夜夜聽（使君は一人でいつも忙しいのを残念に思い、夜な夜な琵琶の演奏を）聞くひまを得ない」に見られるように、中国語ではさらに単に暇な時間を指す場合もある。『水滸伝』の当該部分はまさしくこの意味で使われており、馬琴が忠実に訳したことが見て取れる。ところが、江戸以前の鰻頭屋本、黒本本、易林本『節用集』や、享保二年（一七一七）刊の『書言字考節用集』などではいずれも「クフウ」と読み、『日葡辞書』でも「Cufu 考究すること。Cufusuna（工夫する）熟慮思案する、または、考究すること」と説明する。「ひま」という意味で使う用例は、管見の限り見当たらず、唐話辞書にわずかながらその解説が見える程度である。例えば、

工夫ひま 去ひまト同シ （岡白駒の講義録「水滸伝訳解」、開講時期は享保十二年（一七二七）頃とされる）
工夫コンフ 閑隙也工夫ノ省畫ナリ （前出「忠義水滸伝解」宝暦七年（一七五七）刊）

である。ということとは、「ひま」という意味の「工夫」は近世になってから日本にもたらされ、使用されるようになった語彙であり、近世期の人々が白話語彙として扱っていた可能性は十分考えられる。

一方、『画伝』には唐詩、『遊仙窟』のほかに、唐の随筆、説話集、敦煌変文などに初出すると思われる語彙（全十九語）も確認できた。例えば次の「莊客」「連忙」「困倦」「對手」「倘若」「放慢」などである。十九語を諸辞書、文学作品などと照合したところ、『画伝』以外に用例を見出せない語彙を除けば、いずれも江戸以降の文献にしか存

在が認められない。

(7) 莊客（画伝）卷之二 / 莊客（画伝）卷之三

はじめて背後を見かへるに。片唄は逃迷ふ。莊客們に抑留せられて。（江戸後期馬琴読本『皿皿郷談』卷一）
 箭五郎はこゝろ得て、旅亭主人によしを示して、猛に四下の莊客を、備ふて韓櫃を舁しけり。

(8) 連忙（画伝）卷之四

寺中の人々、『院主こそ鬼になり給ひつれ』と、連忙逃さりぬるのちは、夜々里に下りて人を驚殺し。

（江戸後期上田秋成読本『雨月物語』卷之五「青頭巾」）

（江戸後期馬琴読本『椿説弓張月』前篇卷之三）

(9) 困倦（画伝）卷之九

浩処に濱壇の望子。連忙しく走り来て。

（江戸後期の儒学者広瀬淡窓の随筆「約言或問」十七）

(10) 對手（画伝）卷之十

你 は名もなき下将。わが紀靈將軍の對手にあらず。

（江戸後期池田東籬読本『絵本通俗三国志』初編卷之十）

(11) 倘若（画伝）卷之三 …… 他出例なし

(12) 放慢（画伝）卷之八 …… 他出例なし

以上の例から明らかなように、日本近世文学において白話語彙研究をする場合は、主に白話文学作品を出典とする語彙をメインとすべきだが、四大奇書や三言二拍で頻用される、唐代史料・伝奇小説（『遊仙窟』を除く）・敦煌変文などを初出とする語も、対象に入れる必要があると考えられる。

最後に、この識別基準に基づき『画伝』中の白話語彙を抽出し、まずその分布状況と特徴を確かめる。

四、『画伝』に見られる白話語彙の特徴

『画伝』各巻の漢語語彙（漢字で書かれた語彙）、白話語彙を具体的に数字で示せば【分布表】の通りになる。語彙を採り上げるにあたって、人名・地名などの特殊語彙を除いて一般語彙を対象とした。白話語彙の利用率は執筆が進むにつれほぼ増加する一方であることは一見して明らかである。

また、『画伝』後半部分になると、二文字の単語にとどまらず、次のような長い単語や修飾語を伴う語（傍線を附した箇所）も利用されるようになり、かつ、その数は巻を重ねるにつれ、次第に増えていくことが見受けられる。

【画伝】

（巻之五）漢子はこの光景を見て。不是頭と思ひしかば。檐桶を挑て走り去らんとする處を…。

（巻之六）魯智深はしばし停立てありけれども。とかく門をひらかざれば。大に焦燥。この直娘的禿驢ども。

（巻之七）魯智深は背後に脚步響するを聞けれども。見かへるに違なく。既にその人影ちかづくを見て。暗算的人ありと叫ぶ。

（巻之八）張三李四が徒は智深を見る毎に。匾々の伏て是を敬ひ。

夥の奸誰不及的が。わりなく拖住まゐらせて。屈て小人の下に沈在。今この腌臢的氣を受。是大なる不幸ならずやといふ。

（巻之九）これは該死的の罪犯なりかしといふに。林冲が告すやう。小人元来龔鹵的軍漢なりといへども。

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

『画伝』各巻白話語彙の分布表（重複語彙を含まない）

後帙						前帙					画伝
巻之十	巻之九	巻之八	巻之七	巻之六	巻之五	巻之四	巻之三	巻之二	巻之一	楔子	
273	343	265	308	342	317	297	259	374	380	110	漢語語彙
164	176	142	134	150	118	139	78	126	50	14	白話語彙
60.0%	51.3%	53.6%	43.5%	43.9%	37.2%	46.8%	30.1%	33.7%	13.2%	12.7%	割合

明日より女兒と錦兒を引とり。不揀念の三五年。養ん事いと易し。

寫文書的人を尋來させ。一張の紙を沽て。かくぞ寫させたりける。

前頭の大松林猛惡去処に到りて。彼を結果んは容易けんといひをはり。彼金子を収了つゝ。

(卷之十) 林教頭われ久しく芳しき名を聞つるが。端的好男子ぞかしおもふに高太尉の爲に陥られて。

この堂は營中第一の好處にして省氣力的勾當なり。

倘衣服の汚れ破れたるもあらば。わが家に拿來給へ。漿洗縫補て進らせ候はんとて。

しかれども管營差撥は其人を認らず。まづよきに講了禮して。さて名字を問は。

馬琴の読本には漢語が豊富に使用され、また漢語自体にも特殊なものが多く見られることは周知の事実である。しかし、それは決して突如として起こった現象ではなく、もしかするとこのように白話小説の語彙を流用、模倣することに起因するのではないだろうか。

最後は傍訓の付け方に関する考察である。前節において少し触れたように、『画伝』では同じ語彙でも巻を重ねるにつれて読みに変化が見える場合が存在する。例えば先述の「元来」は、全篇にわたって全て同じ意味で用いられているにも関わらず、卷之七までは「ぐわんらい」と音読みされ、卷之八以降は「もとより」と訓じられる。では、ほかの語彙からも類似する特徴が見出せるのか。次の三例をみてみる。

(1) 囉啤

【画伝】(卷之三) しかれば渠奴等わが村へも来たたりて。囉啤させん事あるまじきにあらず。

(卷之五) われ往にもいへる如く。彼今は此の囉啤ありといふとも。後にはかならず正果を得ん。

(卷之七) 時常軍健們。或は外門の破落戸等が来りて馬を走せ羊を牽。囉啤ことをなすものか

ら。

(卷之八) 前日嶽廟にて。娘子を囉啤せし：

(2) 算還

【画伝】(卷之四) 房銭は躑躅遣りなく算還したれど。

(3) 相貌

(卷之十) ふたゝひ四五盃はひの酒を喫のみて。酒錢さかだいを算還さんじょうし。

【画伝】 (卷之四) 彼人も又史進が相貌堂々さうぼうだうだうとして。好漢よきをものなるを見て。會釋えしやくしつ。

(卷之五) 御身が年甲相貌としががくがくさうぼう。悉く榜たの面おもてに寫しるしたり。

(卷之五) 彼の出家せんといふ人を見るに。形容醜惡かたちしうあくとして見にくく。相貌兇頑かほばせきやうぐわんとしておそろしげなり。

(卷之十) つらく這廝こやつが臉つらを見るに。すべて餓鬼がきの相貌さうぼうあれば。

ルビは概ね最初の音読みから意味解説のような注釈へと変化していくことがわかるが、特徴はこれのみとは限らない。例えば(2)の「算還」、卷之四では古語の「さんよう」が当てられ、卷之十では俗語の「かんじよう」で読まれる。また(3)の「相貌」も、卷之四の例では四字熟語の一部であることから、音読みの「さうぼう」が用いられ、その後は俗語の「かつかう」と古語の「かほばせ」が使用される。

傍訓について、『画伝』の序文「訳水滸辯」には次のような一文が見える。

今予が訳ところは……只顧婦女童蒙の爲に解しやすきを宗とす……その傍訓つうがなのごときに至ては。音訓おみしんに管らざるものあり。譬たとへば詔書じようしよを読んで勅書ちよくしよとし、僧人そうじんを読んで法師ほうしとし。……禅杖ぜんじやうを読んで鹿杖かぜつとし。……金剛こんじやうを読んで二王にわうとし。嶽廟がくびやう……を読んで美嶽神社みたけのやしろとし。人氏じんしを読んで住人ぢやうじんとし、商議しやうぎを読んで談合だんがうとするの類たぐひ。枚挙かぜへあるに遑いとまなし。これ傍訓は字の注なり。しかせざれば。耳に聞くものに喩さへしがたきものあり。その訳すべきものは。本文げんをもてせざれば平等びやうとうせず。又和名のなき物あり。又和訓わくしんの施ほしがたきものあり。その訳すべきものは。本文げんの熟字じゆくじを抄出せうしゅつし。其訳すべからざるものは。我私の筆に操あやつる。この故に一編の文章。古雅こがと今俗こんぞくと混雜こんざつして更に格體かくていを定めず。これ予が情願じやうくわんにはあらず。実に已やむことを得ざればなり。

翻訳作業が後半になると確かに馬琴は序文に記したように、ルビを一つの解釈・説明手段として利用し、また、白話語彙を翻訳する際に俚語俗語を用い、和語にないもの、また和訓を施す術のないものは、原文の白話語彙をそのまま利用する傾向が顕著になるが、前半ではやはり音読み、古語の多用が際立つ。執筆初期の馬琴の白話知識はまだ不十分であったが、作業が進むに従って次第に精熟していったことを、この傍訓の付け方の変化を通して推し

量ることができよう。さらに加えて、例文(3)卷之五のような場面や文脈(原文は韻文にあたる)に鑑みて、わざと古語を用いて訳する用例も認められる。

ルビが音読みから意味解説のような注釈へと変化した要因として一つ想像しうるのは、語彙の左右両側にルビ(片側は字音、片側は和語や類義の字音語)をつける行為の放棄ではないかと考えられる。事実、語彙の左右両側にルビをつける現象は初期の読本作品に既に出現し、『画伝』にも多少見受けられるものの、『画伝』全体に使用されている漢語語彙の量と比べて、その数は決して多いとは言えない。

おわりに

以上、『画伝』の使用語彙を例に、江戸以前と江戸以降の文献中の利用状況を検討することによって、日本近世文学における白話語彙の識別基準を明らかにし、さらにその上で、『画伝』に利用されている白話語彙の特徴を究明した。『画伝』に見られる白話語彙の利用率は後の巻ほど増加する一方であり、かつ、その利用は一字、二字の単語や熟語に止まらず、長い単語や修飾語を伴う語にまで及ぶ。また傍訓に関しては、最初は音読みや、古語が多く用いられていたが、その数も次第に減り、代わりに意味解説のような注釈や俗語が当てられるようになったのである。このことは馬琴の翻訳態度の変化を物語っていると同時に、生涯白話の師を持たなかったとされる馬琴が、執筆の過程で自ら白話の知識を学習していたことをも如実に示している。もしこの仮説が正しいとすれば、馬琴は『画伝』の執筆作業を通してどのように白話学習を行ったのか、次稿にて考察を進める。

注

- (1) 横山邦治『読本』(『日本古典文学大辞典』第六卷所収 岩波書店 一九八五年二月) 一七六頁参照。
- (2) 小松謙『「現実」の浮上——「せりふ」と「描写」の中国文学史』(汲古書院 二〇〇七年一月) 七〇八五頁を参照。

- (3) 藁科勝之『仏蘭西法律書 刑法』における唐話語彙(『国文学研究』第百二十三集 一九九七年十月)。
- (4) 木村秀次『西国立志編 白話語彙考』(『千葉大学教育学部研究紀要』第五十巻 二〇〇二年二月)。
- (5) 張海燕『古今奇談英草紙』と白話語彙(勉誠出版 二〇一七年三月) 一〇四頁に詳しい。
- (6) 陶山南濤の『忠義水滸伝解』(宝暦七年(一七五七)刊)は、百二十回本『水滸伝』の第一回から第十六回までの単語を、出現順に原文から抜き出し、発音と意味を記したものである。
- (7) 鳥山輔昌『忠義水滸伝抄訳』(天明四年(一七八四)刊)は陶山南濤の『忠義水滸伝解』の続編として出されたもので、『水滸伝』第十七回から第三十六回までの語彙が収録されている。
- (8) 奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎研究』(関西大学出版部 二〇〇七年三月) 二二三頁に拠る。
- (9) 石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』(清水弘文堂書房 一九六七年九月) 三〇九頁を参照。
- (10) 曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』(岩波文庫 二〇一四年六月) 二一八頁を参照。
- (11) 高島俊男『水滸伝と日本人』(大修館書店 一九九一年二月初版) 一九九七年九月の再版、一七二頁を参照。
- (12) 馬琴旧蔵和刻本『忠義水滸伝』は現在昭和女子大学図書館桜山文庫に所蔵されており、初集(第一回〜第十回、享保十三年(一七二八)刊)は『画伝』執筆のために馬琴自身が買入れたものであり、第二集(第十一回〜第二十回、宝暦九年(一七五九)刊)は『画伝』の相板元・盛文堂前川弥兵衛から馬琴に贈られたものである。
- (13) 名古屋大学附属図書館小林文庫蔵本(国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100001388>)に拠る。
- (14) 『色葉字類抄』(橘忠兼編)は平安末期に成立した古辞書で、日常実用の語を主として、広く和語・漢語を採録している。ここでは中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引』(風間書店 一九六四年六月)を用いる。以下同様。
- (15) 室町時代から江戸時代初期までの「節用集」を「古本節用集」といい、刊本に文明本・黒本本・天正本・饅頭屋本・易林本などがある。ここでは中田祝夫『古本節用集六種研究並び総合索引』(風間書店 一九六八年四月)、同氏『文明本節用集研究並びに索引』(風間書店 一九七〇年七月)を用いる。以下同様。
- (16) 『日葡辞書』はキリシタン宣教師の日本語修得のために日本イエズス会が刊行した辞書である。本篇は慶長八年(一

日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察

六〇三）、補遺は翌年に刊行。ここでは土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店 一九八〇年五月）、白井純編『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵 日葡辞書』（八木書店 二〇二〇年三月）を用いる。以下同様。

(17) 日本語訳は小松謙『詳注全訳水滸伝』第一巻、第二巻（汲古書院 二〇二一年八月〜二〇二二年四月）を参照。以下同様。

(18) 中田祝夫・小林梓次郎『書言字考節用集研究並びに索引』（『風間書店 一九七三年三月』）を参照。

(19) 岡白駒の講義録と見られる写本は二十部ほど確認でき、うち、良斎という人物が筆写したもの（外題「水滸伝訳解」）の末尾に講義の様子と開講の時期が記されているという（宮本陽佳『水滸伝訳解』にみる岡白駒の『水滸伝』研究——解釈の方法とその継承——）（『和漢語文研究』第十三号 二〇一五年十二月）に拠る）。

付記…本研究は、令和五年度科学研究費助成事業・若手研究・課題番号二三K一二〇八四「日本近世文学における中国白話小説の受容——馬琴読本の白話語彙を中心に——」の助成を受けたものである。